

重複障害のある子どもの「視覚を通した環境の把握」と「コミュニケーション」に関する 初期的な力を評価し実践につなげるためのアセスメントはどのようなものですか？

【研究を行った背景】

特別支援学校には、多様かつ重度の重複障害のある子どもが在籍しています。コミュニケーションが困難な場合、実態把握が十分にできないまま教育が開始される場合が少なくありません。特に、重度・重複障害のある子どもの見え方やコミュニケーションについて、見落としがちな初期的な力やそのゆっくりとした変化に対する教員の気づきを促すアセスメントが望まれていました。本研究は平成18～19年度に実施した課題別研究の研究成果を引き継ぎ、重複障害のある子どもの「視覚を通した環境の把握」と「コミュニケーション」に関する初期的な力を評価するアセスメントツールの改良と普及を目的にした研究です。学校で実施しやすく、実践につながるアセスメントを提案することを目的としています。

【研究の成果】

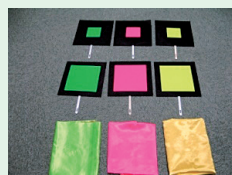
アセスメントについて解説をし、手順や記録用紙等の改良を行い、「実践につなげやすい重複障害のある子どもの見え方とコミュニケーションに関する初期的な力のアセスメントガイドブック（試案）」を作成しました。

●視覚を通した環境の把握に関するアセスメント●

○「実践に生かす見え方アセスメント」

重度の重複障害のある子どもの多くは、視覚障害を併せ有しています。「見えているかどうかかわからない」という状態の子どもを対象として「実践に生かす見え方アセスメント」を提案しました。このアセスメントには次の特徴があります。

- ①最初期の視機能（光覚と色覚）についてどの教員もアセスメントできるよう工夫したこと
 - ②現場で調達できる資材を用いること
 - ③評価が実践につながる方法を提案すること
- ガイドブック（試案）では最初期の視機能（光覚と色覚）のアセスメントについて、手順等をわかりやすく解説しています。



＜アセスメントで用いる光の色フィルター及び色の視標＞

●コミュニケーションに関するアセスメント●

コミュニケーションに関する2つのアセスメントに関して解説し、記録用紙の改良を行いました。

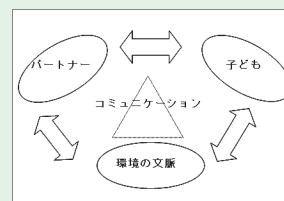
①受信方法と発信方法の発達的变化のアセスメント

コミュニケーション方法の発達的な変化について、最初期 から高度な記号操作までを体系的に反映できるツール

②やりとりの芽生えと展開のアセスメント

発達の最初期のやりとりの芽生えに関して、見落としがちなコミュニケーション行動が細かく反映できるツール

これらのアセスメントでは、今の時点で子どもが持っている見落としがちなコミュニケーションの初期的な力に教員の気づきを促し、その力を子ども自身が最大限に活用できる関わりや環境設定の手がかりを得ることをめざします。



重度重複障害のある子どもとのコミュニケーションが成立する条件 (Siegel-Causey & Bashinski, 1997)

◎コミュニケーション支援の12のポイント

アセスメントの結果をコミュニケーション支援に活用する際の12の支援ポイントを提示しました。

- | | |
|---|---|
| <p>(1) コミュニケーション成立の基本的要素を保障する支援</p> <ol style="list-style-type: none"> ①どこ？がわかること ②なに？がわかること ③だれ？がわかること ④自分に話しかけられていることがわかること ⑤子どもの反応へのフィードバック ⑥やりとり・活動の始まりと終わりがわかること ⑦環境における感覚刺激の調整 | <p>(2) 豊かなコミュニケーションをはぐくむための支援</p> <ol style="list-style-type: none"> ⑧活動の予告 ⑨活動の準備と後片付け ⑩活動の記録と振り返り ⑪子どもの発信の手段と選択肢の用意 ⑫子どもにとっての自然な活動の文脈づくり |
|---|---|

【本研究成果の活用】

(1) 教育委員会や本研究所における研修による普及

教育委員会が主催する研修会や本研究所で実施している特別支援教育専門研修において、本アセスメントガイドブック（試案）の内容を紹介し、より多くの学校で活用していただけるよう普及活動を行います。また、研修には疑似体験を取り入れることにより、アセスメントの内容や結果を実践に生かす方策について理解を深めることが期待されます。

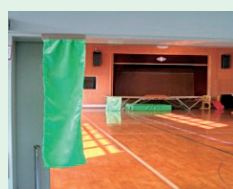
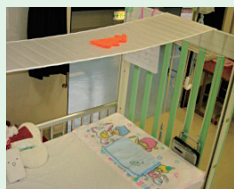
(2) ガイドブック（試案）を学校現場で活用してくださった教員からフィードバックをいただき、ガイドブック（試案）の有用性についての検証を行うと共に、必要に応じて見直しを行います。

【研究協力機関・研究協力者からの実践報告】

研究協力校および研究協力者より、アセスメントやコミュニケーション支援の12のポイントに関連して、すぐれた実践報告を収集しました。重度・重複障害のある子どもを担当する教員からよく聞かれる「コミュニケーションの支援は実際にどう行えばよいのか」「どんな教材でどんな学習をすればよいのか」という声に対し、参考になる視点を提示しています。

①子どもの見え方とコミュニケーションの力を支え育んだ関わりと環境の工夫

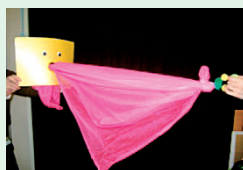
「見る力は明暗程度」と捉えられ、学校で眠ってしまうことが多かった重度・重複障害のある子どもの事例です。アセスメントの結果を手がかりに、教室環境や関わり方の見直しを行い、活動の中で子どもが「わかる」ための支援や配慮を重ねた過程が報告されています。



＜眩しさを軽減するボードと体育館の目印となる蛍光色の布＞

②「教材がつなぐコミュニケーション」～子どもからのメッセージを大切に

見え方とコミュニケーションの力が初期的な段階にある障害の重い子どもにとっての「魅力ある教材」の視点や、教材を通して子どもたち一人一人が主体的に学ぶ活用の仕方が解説されます。教材を媒介にしたコミュニケーションの深まりや広がりが報告されています。



＜集団の学習活動で用いた布バレー遊びの教材と、見やすく操作しやすい活動の始まりのベル＞

【関連情報】

○昨年度までの研究成果についての報告書

平成18年度～平成19年度 課題別研究「重複障害児のアセスメント研究－自立活動の環境の把握とコミュニケーションに焦点をあてて」研究成果報告書

○視覚を通じた環境の把握に関するアセスメントに関連した文献

Dutton, G.(2003). A more detailed look at the visual system. In M. Buultjens & H. McLean (Eds.), Cerebral palsy and visual impairment (CPVI) in children: experience of collaborative practice in Scotland. Scottish Sensory Centre, Edinburgh.

Roman-Lantzy, C.(2007). Cortical visual impairment. An approach to assessment and intervention. AFB Press, New York.

○コミュニケーションのアセスメントに関連した文献

梅津八三（1977）心理学的行動図．重複障害教育研究所研究紀要，創刊号，財団法人重複障害教育研究所．

中澤恵江（2001）盲ろう児のコミュニケーション方法－分類と体系化の試み－．国立特殊教育総合研究所紀要，28，43－55．

Stillman, R., & Battle, C.(1985). Callier-Azusa Scale(H). Program in communication disorders. University of Texas at Dallas. Callier Center for communication disorders.

本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名】

平成20年度専門研究A「重複障害児のアセスメント研究－視覚を通じた環境の把握とコミュニケーションに関する初期的な力を評価するツールの改良」

【研究代表者名】

研究代表者：齊藤由美子

研究分担者：中澤恵江

所内研究協力者：大崎博史 大内 進